文化は“使う”もの
～生きる力を育み、街を活性化させる力～

ピアニスト・一般財団法人地域創造 理事　仲道　郁代

私は演奏活動を続けて28年目に入りました。全国津々浦々、延べにして2,000館以上はうかがっております。最近では、小学校へうかがうことも多くなりました。

そうした中で、最近では会館にうかがうと、楽屋口から入った瞬間に、そこがどういう状況か、なんとなくわかるようになってきたのです。小学校も昇降口に足を踏み入れた瞬間に、その学校がどんな感じなのかわかる気がいたします。

それは、楽屋口に職員の方々がたくさん迎えに出てくださったとか、そういうことではありません。やはりその建物の中の雰囲気や“気”など、感じるものがあるのです。もっと言えばホールに行かずとも、その町の駅から一歩出た時に、その町がいまどんな感じなのかといったことを、感じることがあります。

文化の効果は表しにくい

数年前のことですが、私は芸団協（日本芸能実演家団体協議会）が主催し、音楽議員連盟の議員の方々や文化関係者が出席するパネルディスカッションに参加したことがあります。その中にはある大臣も参加されていました。その大臣が、「文化は、すばらしいものだとわかっている。もちろんそうだけれども、数字で表してくれないと、国民の大切な税金を使うのに簡単には使えない」と発言されました。

確かに、大切な税金を使って何かをするわけだから、それがどういう効果をもたらすのか示せなければいけないと、その時は思いました。でも何か釈然とせず、ずっと考えていました。そして思ったのです。大臣にご自身のお子さんがいたら、その子にどれだけの教育費用をかけたらどのくらいの見返りがあるかとか、あるいは自分が幸せになるために、どれだけのお金をかけたらどのくらい幸せになるのか、そのようにお考えになるのかな、と。そんなことは、ありませんよね。

世の中に生きている人は、誰もそのようには考えません。ですから、さきほどの議論はいかがなものかと思ったわけです。

ここでアメリカのケネディ大統領が、演説でよく使った言葉を引用したいと思います。

Some men see things as they are and say, Why; I dream things that never were and say, Why not.

これは社会思想家・劇作家のジョージ・バーナード・ショーの言葉です。普通はそこで起きている現象を見て、「なぜそうなのか」と表面的にものを見る。しかし、私はそこにないものを夢見ると。Why not は英語では、なぜできないのかと考えるというより、できるのではないか、という意味です。

先ほどの、数字がなければ国民の税金を使えないという考え方から、この考え方は数十段も飛躍していますが、私はこのケネディの言葉には尊敬を覚えました。

けれどもやはり何か示せるものがなければいけないわけで、夢ばかりを語っているわけにもいきません。

では、文化で何ができるのか。まず言えるものは、福祉や教育での評価です。「数字に表せないたいせつなものを文化芸術は供給している」とか、「文化事業は単体では採算性は低いと思われているが、第２の経済効果を視野に入れると、予算以上の経済効果がある」など様々な効果が挙げられています。文化は決して金食い虫ではありません。

仲道　郁代（なかみち　いくよ）

略歴

桐朋学園大学１年在学中に、第51回日本音楽コンクール第１位、あわせて増沢賞を受賞。数々の国内外での受賞を経て、1987年にヨーロッパと日本で本格的な演奏活動をスタートさせた。古典からロマン派までの幅広いレパートリーを持ち、これまでに日本の主要オーケストラと共演した他、海外のオーケストラとの共演も数多く、人気、実力ともに日本を代表するピアニストとして活動している。

国内外で多くのコンサートを行う他に、子どもたちに音楽との幸せな出会いをしてほしいとスタートしたプロジェクト「光のこどもたち」「不思議ボール」、各地の学校を訪問するアウトリーチ活動など、魅力的な内容とともに豊かな人間性がますます多くのファンを魅了している。レコーディングはソニー・ミュージックジャパンインターナショナルと専属契約を結び、多数のCDをリリース。最新盤の【モーツァルト：ピアノ・ソナタ全集】は『レコード芸術』誌の特選盤に選ばれるなど高い評価を得ている。著作に『ピアニストはおもしろい』（春秋社）等がある。テレビ番組、新聞、雑誌、ラジオなどメディアへの出演も多く、音楽の素晴らしさを広く、深く伝える姿勢は多くの共感を集めている。

2003年からは、地域社会の活性化と音楽文化の発展を目指し、大阪音楽大学特任教授、一般財団法人地域創造理事を務め、2012年からは桐朋学園大学教授としても積極的に活動している。

©Kiyotaka Saito

東京オリンピックが文化活動のきっかけに

2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。開催に関してはいろいろな意見がありますけれどもやはり開催すると決まったからには一番いい結果をもたらさなければなりません。オリンピック憲章には、オリンピックはスポーツだけでなく、文化の祭典でもあると明記されています。2012年のロンドン・オリンピックでは、文化プログラムを英国全土で開催しました。４年にわたって約18万のイベントが行われ、4,340万人が参加しました。文化芸術機関がさまざまな枠を超えて取り組んだ結果、ロンドン・オリンピックの経済波及効果はGDPの約２％となり、このうちロンドンと、ロンドンに隣接する地域で56％、ロンドンに隣接しない地域でも44％の経済波及効果が見られました。ロンドン・オリンピックは英国全土に「何か」をもたらしたのです。なんと2014年の世界の都市総合力ランキングで、ロンドンは１位に躍り出ました。２位がニューヨーク、３位はパリ、そして４位が東京です。

普通、オリンピックが終わると観光客は、ぐっと減りますが、英国の場合は2013年に1,600万人で、オリンピックのあった2012年から11％の増加となりました。ロンドンだけを取ると、８％の伸びです。

では東京オリンピックの場合、どうなるのでしょうか。東京都の試算で、３兆円の経済波及効果があるという数字が出ています。雇用誘発数が15万人です。民間の試算数字ではもっと高い数字が出たりしています。

私は文化庁の文化審議会の文化政策部会に出席させていただいていますが、文化庁では「第４次文化芸術の振興に関する基本的な方針」をとりまとめ、閣議決定されることになっています。なぜ今、オリンピックのことを話しているかというと、この方針の中で、2020年に向けて文化を支えるシステムづくりを全国で行うことを、とても大きく謳っているからです。そしてその後の地域活性化につながる仕組みをつくろうという趣旨になっています。

文化の経済波及効果の例として、北九州市の北九州芸術劇場が挙げられます。オープンから８年で経済波及効果が24億6,100万円、来場者31万1,000人になりました（2010年度）。

人々が集まれば、そこに飲食がありショッピングがあります。ですからオリンピックに限らず何かイベントが行われると、それ単体で終わるわけではないのです。さて、このような実績をはじき出すには何があったのでしょうか。簡単にいえばイベントだけで終わらせない工夫です。そこには、その町の魅力をどう見せていくかという工夫がつまっているのです。でも世の中、厳しいですから、そんなことをする予算はどうやって捻出するのか――という話にすぐなります。文化庁の審議会でもすぐ、その話が出ます。

例えばピアノでもそうです。すばらしいスタインウェイがある会館にありました。ピアノは消耗品なので長年使っていると修理が必要になります。そこで入札が行われるわけですが、なるべく予算を低くしたいということで、一番安いところに頼まれたわけです。その結果、どうなるでしょうか。

みなさんの住んでいる家、お乗りになる車の修理で一番安いところにお願いすると、不安じゃありませんか。車の部品代より修理代が安くなりますと言われても、ちょっと不安です。でも公共のものになると平気で行われ、しかもそれが正義のようになって

しまうことがあります。しかし、これは何を大切に思うかの考え方によります。そのピアノの場合はこのように修理をされた結果、使えなくなって結局は処分され、新しいものを買わざるをえなかったと風の便りで聞きました。少ないものの中でどう上手にやりくりしていくかという問題はとても重要です。文化庁の文化審議会の会長である宮田亮平さん（東京藝術大学学長）は、「清貧に前向きに生きる」とおっしゃいました。これを本年度のキーワードとしてつくりました。文化は、お金がないからという理由で一番にカットされがちですが、でも実は、一番お金がかからないジャンルでもあると思います。なぜなら、文化が大切にするのは人だからです。人と人とをつなげ、人を育てるものが文化だからです。

私が見つけた文化を感じる場

それではここで、文化施設にはどんなことが必要なのかについて、話をさせていただきます。

今、東京で流行っているところ、魅力的と思われているところをいくつかまとめてみました。東京は都会だから、皆様のところとは違うのではないかとは思わないでください。魅力をつくるための道筋はどこでも同じであって、通用することだと思います。

１つの例は、六本木にある有名なビルです。商業施設のほか住居も入っているビルですが、すごく魅力的です。なぜならば、アートにものすごく力を入れているからです。人気のある施設は、全て文化的で多様な、優れた側面を持ちます。日本全国、いろいろなところを考えてみてください。文化も多様性もない施設は、おそらく魅力に欠けています。このビルでは、毎週のようにさまざまなイベントがあります。常に人の五感を刺激する何かが起きています。その魅力が人をそこに集わせるのだと思います。

次に新宿のあるデパートの例です。何がすごいかというと、まずは商品の陳列に工夫をしています。例えば、靴とハンドバッグがいっしょにあるだけではなくて、トラベルのためのブースがあったり、食べ物があったり、いろいろミックスされたおもしろい提示の仕方をしています。買い物にきた人は１つのものを買いながら、次はこれがおもしろそうと、魅力を見つけることができます。

同じデパートの地下食品売り場では、食品を売っているだけではありません。キッチンがつくられており、そこに有名店のシェフが来て、そこで料理講習をしながら、見ながら食べることができます。集まった人たちは材料を買うだけでなく、今度この店に行ってみようかなと思ったり、次はこれとこれを工夫してこう料理してみようかなと思うわけです。一元的にその品物を買って帰る効果だけではなく、二次、三次での興味につながります。その結果として、このデパートに人が向かう確率が高くなっていきます。

三つめの例は代官山にある書店です。ここでは店の中にピアノがあったり、古い本でつくられたテーブルがあったり、人が集える場として、買い物だけではなく文化交流の場として機能しています。また、こちらの書店は、佐賀県武雄市の図書館も手がけています。官と民の在り方など、いろいろ議論もあるかもしれませんが、実際、多くの人が集まっているわけですから、何かそこには魅力があるのではないでしょうか。

最後に京都のある和菓子屋さんをご紹介します。このお店はフランスのシェフとコラボしたカフェをつくりました。これはとてもすてきなお店です。老舗のお店は、伝統を崩さないように思えますが、このお店の昔からのお菓子が、かわいくパッケージされています。それまで和菓子に興味のなかった人たちが興味を持ち始めます。

柔軟な発想でコラボレーションすることが大切なのです。どう魅せるか、それを考えるのも文化です。そしてそういうことを考えられる人をつくるのが、行政の仕事です。それは幸福な社会、発展する社会をつくることにつながっていきます。先ほどのケネディ大統領の言葉にあるように、今あることでどうしようと考えるだけでなく、次の夢に向かってできることがあると考える力が大切です。これこそ、今一番求められていることなのだと思います。

人と人をつなぐ文化

ここで2020年の日本の人口ピラミッドを考えてみましょう。これから人口が一番上がっていくところが50歳代、60歳代です。2040年になると70歳代近いところが一番多くなります。

ではその時に、皆どうやって生きているか。日本人の寿命はすごく伸びましたけれども、健康寿命と平均寿命はまた別です。健康寿命は、平均寿命よりだいたい７、８年短いそうです。健康に動ける年代から、その後７、８年は生きるのです。その時に足が動かない、膝が痛い、スポーツもできない、と

なってしまっているかもしれません。

そういう時に、皆とつながって楽しく幸せにいられるかどうかは文化的な生活ができるかどうかにかかっているのではないでしょうか。そこに文化があれば、人と人はつながりをもつことができ、生活の張りが出て、多少、体が不自由でも前向きに生きていけます。

日本人の平均年齢が上がり高齢化していくこれからの社会で、楽しみとか生活の張り、生活をスムーズに回していく術（すべ）を持つために、今何が必要か。それはそういう場所をつくること。そして、方法を編み出せる人を育てることです。行政は、そのための整備をしていく必要があります。

人口２万3,000人ぐらいの宮城県の七ヶ浜町という町には、七ヶ浜国際村というホールがあります。大震災の時、このホールは高台にあったため、ホールの足元まで津波が押し寄せましたが、無事でした。そしてその後は避難所になりました。ホールの職員さんは、町の人たちをよく知っており、地域としっかり向き合い関わっていたため、国際村が避難所になった時、地元の人たちの場として有効に作用したのです。国際村ではそれまでも子どもたちのミュージカルを催すなど、地域の活動にもとても熱心に取り組んでいました。もしこのホールが１回の公演を打って、人を集めて終わりというホールであれば、担当の人は町の人たちの中に入り込めなかったでしょう。そして町長さんのお考えで、まだ避難所での寝泊まりがつづけられる中、子どもたちを集めてミュージカルの練習が再開したのです。子どもたちの歌声が、避難所にいる人たちの希望になりました。このホールで、私も震災があった年の５月にピアノを弾かせていただきました。地元の方やお手伝いで来ているボランティアの人たちも、仕事をしながら、聴いてくださったり、途中で入ってしばらく演奏に聞き入り、また出て行かれたり……とそんな時間となりました。

皆様、考えてみてください。ご自身の町の中でいろいろな人が集える場として、町の人が把握している場はありますか。文化ホールや文化イベントの場は、いろいろな人が集える場であり、人をつなぐ場となれるのです。世の中に住んでいるいろんな人が集える場です。

市民のアート戦略で甦ったグラスゴー

海外の事例です。スコットランドのグラスゴーは、産業革命で栄えた町ですが、第２次大戦後、造船や繊維産業の衰退にともない失業者が町にあふれました。グラスゴー市はいろいろなことをしたそうです。でも何をしてもだめ。最後に、アーティストになんとかしてくれと頼むことにしました。行政の方からすると一番信用できない、当てにならないと思っているであろう人たちに頼んだのです。

グラスゴーでは、廃屋に貸しギャラリーをつくったり、お金のないアーティストがコラボレーションで何かすることができる場所を貸したり、ワークショップを開いたりと、コツコツと地道なアート戦略を進めました。お金もそんなにかけていません。その結果、グラスゴーはどうなったでしょうか。美術館前のウェリントン公の銅像の頭には工事用のコーンが載っています。でもグラスゴー市は、それをおもしろいと思ってそのままにしました。今やグラスゴー市といえば、何かおもしろい町、何かが起きている町と考えられるようになりました。そしてこのコーンをかぶったウェリントン像は町のシンボルになりました。1990年にはヨーロッパ文化首都に選定され、現在はスコットランド随一の文化・経済・商業の中心地になっています。このように、新たな発想を受け入れて何かやろうとしたことが、町を更生させたのです。産業でも経済でもなく、文化が町を更生させた好例だと思います。

文化と芸術について

前文化庁長官の近藤誠一さんがまとめられた「文化芸術の力」というものがあります。その中で近藤さんは、文化芸術について経済効果や、観光資源、国際的役割、思想など、いろいろな面での効果があることをお話しされています。実際、文化庁の審議会などに、経済産業省や観光庁の方がいらっしゃっていかに文化とつながって、戦略を練りたいか――という趣旨のお話しをされています。文化を単体ではなく、経済や観光と結びつけて発展させようという流れになっています。

ここで、文化と芸術の違いについてお話しします。地域創造の20周年の冊子でも、一文を書かせていただきましたが、文化というのは日常の生活なのです。

ご飯を食べるのも文化だし、昔から根付いているお祭り、着る洋服、人と話すことも文化です。文化なくしての生活はありません。こういう日常的なものをすばらしい産物として追求し、結晶化したものが芸術です。芸術に向かわない文化があるとしたら、それは一時の流行りであって、残っていきません。人間はその文化を、芸術に昇華させることによって後世に残してきました。そしてその知恵を次の世代が受け継いできたわけです。

音楽は人を癒し社会に役立つ

私は音楽家ですので、次に音楽のお話しをします。あるリサイタルにいらした方のお話しです。その方は脳梗塞を患ったお母様を連れてきました。お母様は病気になるまでは朗らかでお料理や家事も得意でいたのに、病気をしてから非常に後ろ向きになってしまったそうです。そしてリサイタルにいらっしゃいました。演奏を聞いた時、お母様は涙が止まらなかったそうです。ただただ、涙が止まらなかった。

言葉で何か言うよりも、あるメロディが人の心に伝わることがあります。そんな心にしみる音楽、これがクラッシックです。

また、やはりクラッシックは演奏していて楽しいものでもあります。ベネズエラには、貧しい子どもたちに楽器を与えて練習を重ね、今や世界を回るようになったエル・システマという楽団があります。その子どもたちの生きる力は演奏から生まれます。皆様も合唱するなど、声を合わせると楽しいですよね。

このように、音楽には鑑賞と実践という2つの側面がありますが、それだけではありません。

「鑑賞する」と「実践する」という2つを組み合わせてみると、新しい側面つまりワークによって音楽をするという面が出てくるのです。ワークすることによってコミュニケーション能力や想像力を高めることができます。

ネアンデルタール人も歌っていたそうですが、言葉以前に人は音でつながることができます。全ての国の全ての文化に音楽があります。ですから音楽は音を触媒にして人と人がつなげる、ものすごいツールになるのです。音楽は無条件に感動をもたらしてくれます。そして音楽は、美術とも結びつくし、ダンスや、伝統芸能や演劇とも結びつきます。音楽は全てのジャンルと結びつくことができます。また、音楽は教育、福祉とも結びつきます。まさに生まれてから死ぬ時まで、人生のあらゆる場面に音楽は存在するのです。

そして音楽はさまざまな目的と融合できます。芸術の理解を助けるだけでなく、心の栄養になり、創造力や心の柔軟性を育みます。音の振動というところでは理科と結びつき、いろいろな国の歴史と音楽、体を動かすことと音楽など、全ての学びと結びつきます。そういうことによって相互理解を助けるだけでなく、社会の中でもとても役に立ちます。

グラスゴーの免疫学会を盛り上げた市民活動

それではここでワークの例をご紹介します。

例えば、会場の皆様を、列ごとにグループ分けしてみましょう。1人ずつ紙に丸か、三角か、四角を、書いたとします。今日は時間がないのでいたしませんが、頭の中で書いてください。ここで、「それぞれの列がグループになって、この丸と三角と、四角を使って音楽をつくってください」と言われたら、どうしますか。実際、私はこのワークを何度かしています。地域創造のステージアウトという公共ホールの職員さんたちや、音大生にもしてみましたが、皆さんできました。それぞれのグループが異なる感覚、異なる考え方で音楽をつくりました。このワークをするには、ものすごくコミュニケーション力が必要です。それから創造力と想像力も必要ですし、それを取りまとめていくスキル、考えるスキルも必要です。つまり、人間力が必要なのですね。そういう力が、今一番、社会で求められている能力だと思います。

なぜ、この丸と三角と四角を使って音楽ができるかというと、音楽には正解はないからです。もし正解というものがあれば、ワークショップはできません。正解がないので、それぞれのグループの参加者が全く違った考え方で、こうやったほうがいい、こう考えたらおもしろいと言えるわけです。与えられた課題をそれぞれが咀嚼し、譲歩し、協力し、そしてつくり上げることができるのは、正解がないからです。文化や芸術は正解がないので、こういった力を育むことができるのです。このようなことにチャレンジする過程で学ぶことは多いのです。これを学問的にはlearning by doing（行うことによって学ぶ）と言うのだそうです。

先ほど紹介したグラスゴー市で、世界初の免疫学会が開催されることになりました。そこでグラスゴー市は、これを広めるために、いろんなアーティストに

呼びかけて何ができるかを公募しました。その中で音楽が果たしたことの一例に、遺伝子の配列への理解を助けたということがありました。遺伝子が異変を起こすと病気になったり、免疫力が下がったりするそうですが、それを「タタタターン」と、ベートーベンの「運命」の動機を用いて学ぶのです。ベートーベンの「運命」は、実は、「タタタターン」というこの４つの音だけでできているのです。これが、例えば最後の音でちょっと上がるなど変化していきながら音楽は構築されています。遺伝子の配列の変化も、考え方としてベートーベンの「運命」と同じになります。グラスゴーでは幼稚園児から中学生までの子どもたちを集めて、この「運命」の考え方に則して音楽をつくろうというワークショップを行いました。そして幼稚園児までが、遺伝子配列について理解するということになったというのです。

遺伝子というものはこういうふうに変わるんですよ、と言葉で言っても絶対理解しないものを、「運命」という音楽を使うワークショップによって理解しているのです。参加した子どもの保護者からは科学的研究の複雑な領域をとても新しい方法で学習できることを実感したという感想があったそうです。社会の中のあらゆることに、こういう考え方は当てはめられます。

他にも、グラスゴーでは駅で人々が手をつないで、遺伝子のようになってグラスゴーに来る人たちを出迎えるというパフォーマンスをしたり、様々な試みがなされましたが、どれもこれもたいしたお金はかかりませんでした。このような一連の活動によって、免疫学会が世界で初めてグラスゴーで開催されることが広く知れわたり、免疫学に興味がなかった人までが見に来るようになったのです。町の人も参加したので、町の活気につながり、おもしろい展開となりました。

次は私が小学校で行った音楽ワークショップの例です。フラフープや、シャボン玉を使ったりして行うこともあります。子どもたちは、話し合って音楽をつくったり教え合ったりします。自分の考えたことが褒められてうれしいとか、難しかったけれども皆で頑張ってやってできたとか、皆で協力し工夫することが楽しいとか、そういう感想が出てきます。ワークショップに参加した子どもたちは、いろいろ考えてアイディアを共有し、受け入れ合う。発言する自由があり、喜びを感じられる。自分を認めてもらい、人も認める。いろいろな人がいてそれぞれを認め合うことができる。ありのままを認めてその個性を伸ばし、その時の自身を受け入れる。これは、理想的な社会の姿ではないでしょうか。皆様が目指している町のありようとは、これなのではないかと、私は思います。

この町がすてきと言った時に、なぜ、すてきだと感じるのか。それは経済と商業がすごいというだけではないと思います。それだけでは誇りには思えません。文化があってこそ人々に誇りが生まれる。文化がないところに、何の誇りも、魅力もないのではないかと思います。

ではそのために何をしたらいいのでしょうか。そんな音楽のプログラムを考えて設定するのは、難しそうだとお考えかもしれませんが、そんなことはないのです。行政の方には、町の人が関わり、生き生きと参加でき、チャレンジするような状況をつくってあげて、それを担保してあげればいいのです。行政がそういった姿勢を打ち出して、場をつくって、人が動きやすくしてあげることです。そんなに危険なことだと思いませんし、お金もかかりません。もしかしたら、すぐにでもできてしまいます。町や村の中には、きっとすでに動ける人、動きたい人がいます。動いていいのだと思いさえすればその人たちがちゃんと動きます。公と民が連携して動きます。もし、動きにくくなっている障害があったら、１つでもそれを取り除いてあげると、何かが始まっていくにちがいありません。

文化があるから町は活性化できる

最後になりますが、夢が世の中をつくってきたのだと、私は思います。早く移動したいという夢から新幹線ができたり、病気を治したいというところから新薬ができたり、科学の発展も人の発展も全て夢からです。夢から現実をつくっていく。ですから、現実を見るだけでは夢は膨らみません。

夢を現実化するには感性が必要ですし、こだわりや工夫が必要です。そしてその感性やこだわりとはまた、文化なのであり、芸術へのベクトルが生み出すものです。文化を使って人の幸せを生み出すようにならなければ、夢は実現しません。夢が実現できない社会は不幸だと思います。

文化なくして生きる力は育まれないし、まちは活性化しないと私は断言したいのです。ぜひ文化を使って、皆様のまちがより幸せなまちになりますようにお祈りしております。